

心理学分野における オープンアクセスの進展

筑波大学 情報学群
知識情報・図書館学類
大原 司

同志社大学 社会学部
教育文化学科
佐藤 翔

筑波大学
図書館情報メディア系
逸村 裕

発表の構成

1. 研究背景
2. 先行研究
3. 研究目的
4. 研究対象
5. 調査概要
6. 調査結果
7. 考察
8. 今後の課題

1. 研究背景

シリアルズ・クライシス^[1]

- 雑誌価格高騰
- 商業出版社による学術雑誌市場の寡占
- 北米では1980年代、日本では1990年代に顕在化

オープンアクセス(以下OA)運動

- 「インターネットを介して、雑誌掲載論文等の学術文献に誰もが障壁なくアクセスできる環境を実現すること」が目的^{[2][3]}

1.1 OAの実現手段^[2]

(1) OAジャーナル(OA雑誌)

- 著者に費用負担させるAPC(Article Processing Charge)モデルなど、購読料に頼ることなく論文を出版する
- J-STAGEによる電子出版、PLOS ONEなど

(2) セルフ・アーカイビング

- 著者自身が査読済み論文を電子的アーカイブに公開する
- 機関リポジトリ、個人サイトでの公開など

2.1 国内研究者のOAの認知・利用

調査年	調査者	調査対象	OAの認知度	OA情報源の利用経験
2005	国立大学 図書館協会 [4]	全分野	29.0%	—
2007	倉田ら ^[5]	医学分野	34.1%	83.1%
2010	佐藤ら ^[6]	心理学分野	58.8%	92.2%

2.2 OAの進展状況

OAによって入手できる論文の割合を調査

Kurataらによる研究^{[7][8]}

- 海外の生物医学分野の論文が対象
- 2006年、2008年、2010年にそれぞれ調査を実施

PubMed

生物医学分野の論文

2005年度刊行

2006年
調査

2007年度刊行

2008年
調査

2009年度刊行

2010年
調査



Google.comより

Testing for rare variant associations in complex diseases. Asimit J, Zeggini

The screenshot shows a Google search interface. At the top left is the Google logo. The search bar contains the text "Testing for rare variant associations in complex diseases. Asimit J, Zeggini" and a blue search button with a magnifying glass icon. Below the search bar are navigation tabs: "ウェブ" (Web), "動画" (Videos), "ショッピング" (Shopping), "ニュース" (News), "画像" (Images), "もっと見る" (More), and "検索ツール" (Search Tools). The search results are displayed below, starting with "約 1,170 件 (0.51 秒)". The first result is a blue link titled "Testing for rare variant associations in complex diseases. Asimit J, Zeggini E. の学術記事". Below the link is a snippet: "Rare variant association analysis methods for complex ... - Asimit - 引用元 111 ... and functional impact of rare coding variation from ... - Tennessen - 引用元 406 Statistical analysis of rare sequence variants: an ... - Dering - 引用元 86". The second result is a blue link titled "Testing for rare variant associations in complex diseases" with a green link "genomemedicine.com/content/3/4/24" and a dropdown arrow. Below the link is a snippet: "このページを訳す J Asimit 著 - 2011 - 引用元 5 - 関連記事 2011/04/27 - The identification of rare risk variants could have major implications in understanding complex disease etiopathogenesis. ... Asimit J, Zeggini E: Rare variant association analysis methods for complex traits. Annu Rev Genet ...". The third result is a blue link titled "Testing for rare variant associations in complex diseases" with a green link "genomemedicine.com/content/3/4/24/comments" and a dropdown arrow. Below the link is a snippet: "このページを訳す The study of rare variants holds the promise of accounting for some of the missing heritability in complex traits. Next-generation ... The identification of rare risk variants could have major implications in understanding complex disease etiopathogenesis. ... Asimit J · Zeggini E ... Jennifer Asimit* and Eleftheria Zeggini.



Google.comより

Testing for rare variant associations in complex diseases. Asimit J, Zeggini

検索結果上位20件を調査

[genomemedicine.com/content/3/4/24](#) ▶ このページを訳す

J Asimit 著 - 2011 - 引用元 5 - 関連記事

2011/04/27 - The identification of rare risk variants could have major implications in understanding **complex disease** etiopathogenesis. ... **Asimit J, Zeggini E: Rare variant association** analysis methods for **complex** traits. Annu Rev Genet ...

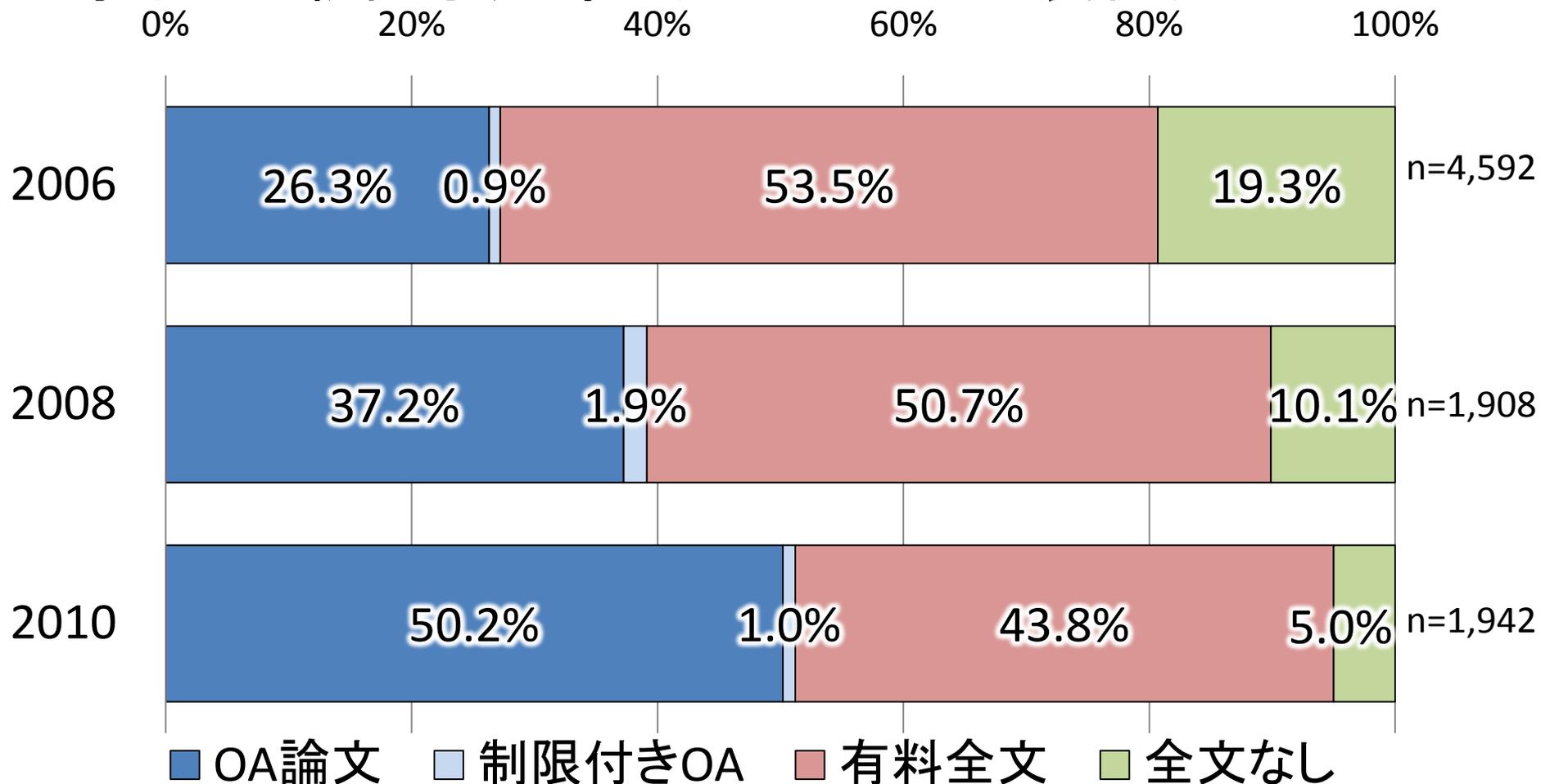
Testing for rare variant associations in complex diseases

[genomemedicine.com/content/3/4/24/comments](#) ▶ このページを訳す

The study of **rare variants** holds the promise of accounting for some of the missing heritability **in complex** traits. Next-generation ... The identification of **rare risk variants** could have major implications in understanding **complex disease** etiopathogenesis. ... **Asimit J · Zeggini E** ... Jennifer **Asimit*** and Eleftheria Zeggini.

2.2 OAの進展状況-2

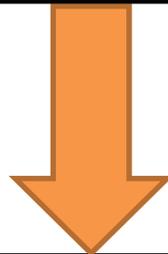
海外の生物医学分野におけるOAの進展状況



3. 研究目的

先行研究

国内の心理学分野におけるOAの認知と利用経験
海外の生物医学分野におけるOAの進展状況



研究目的

国内の心理学分野におけるOAの進展状況を
明らかにする

4. 研究対象

『筑波大学心理学研究』
掲載論文

引用

『筑波大学心理学研究』の
引用論文

国内心理学分野の論文

4. 研究対象

『筑波大学心理学研究』
掲載論文

引用

『筑波大学心理学研究』の
引用論文

国内心理学分野の論文

4. 研究対象

引用という形で研究者に
利用される文献を調査

引用論文

国内心理学分野の論文

4.1 『筑波大学心理学研究』

筑波大学人間系心理学域の紀要

つくばリポジトリにて公開

年2回刊行

一定以上の文献需要がある

- CiNiiから機関リポジトリへのリンククリック数^[2]
- ILLの依頼数^[9]

引用文献は心理学分野の文献の集合であると考えられる

5. 調査概要

1. 引用文献の集計

2. 論文公開状態調査

5.1 引用文献の集計

集計対象

- 『筑波大学心理学研究』第31-45号の掲載論文(2006年以降刊行)の引用文献
- 和雑誌掲載もしくは日本語の論文

「子の親に対するかかわり方」からみた 心理的離乳への過程仮説

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 池田 幸恭

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 大竹 裕子

筑波大学心理学系 落合 良行

A hypothesis concerning the process of psychological weaning from the perspective of the child's relation towards parents

Yukitaka Ikeda, Yuko Otake and Yoshiyuki Ochiai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to propose a hypothesis concerning the process of psychological weaning from the perspective of how children perceive their relations towards parents. Three-hundred-and-one participants, ranging from junior-high school, high-school, university to graduate-school students, described their relations towards parents. Based on analyses of their responses, the following three hypotheses are proposed. (1) Nine types of relation towards parents were observed:

Tsukuba Psychological Research

2006, 31, 45-57

2006年以降に刊行の 『筑波大学心理学研究』 掲載論文

「いい親子関係は、子どもの発達とともに変化する」必要があるといえる。すなわち、心理的離乳を遂げるためには、子が変わっていくだけではなく、親もまた変わっていく必要がある。子と親の双方が、心理的離乳を進めていくために努力をしていくことが、親子関係においては大切であるといえる。

今後は、本研究において提起された「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点からみた心理的離乳への過程に関する仮説を確かめる必要がある。さらに、Table 1に整理された、親子関係を検討するための「かかわり方の主体」と「認知の主体」という観点を合わせて、心理的離乳への過程を解明していくことが課題である。

要 約

本研究の目的は、「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から、心理的離乳への過程に関する仮説を提起することである。そのため、中学生、高校生、大学生、大学院生の計301名から、「子の親に対するかかわり方」の認知に関する記述を収集した。収集された記述を整理した結果、「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から、心理的離乳への過程に関する次の3つの仮説が提起された。

(1) 子が認知する「子の親に対するかかわり方」は、「子が親をたよりにするあり方」という観点から分析することが有効であり、この観点をもとに次の9種類に分けられる。

- 1-全面的に親をたよりにして、自分が自分を委ねるといのかかわり方
- 2-たよりになる理想的な親を子がまねるといのかかわり方
- 3-困った時には親をたよりにして、子が親に頼むといのかかわり方
- 4-親をたよりにしたくないとして、子が親から離れようとするといのかかわり方
- 5-親をたよりにしてもしかたがないとして、子が親を見切るといのかかわり方
- 6-親をたよりにする関係の変化を求めるといのかかわり方
- 7-親をたよりにできるかどうかにかかわらず、子が親を一人の人間として理解するといのかかわり方
- 8-親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいたとして、子が親を思いやるといのかかわり方

9-親をたよりにすると同時に親のたよりになり、子が親を支えるといのかかわり方

(2) 心理的離乳は、上記の9つの順に経過していく。

(3) 心理的離乳を遂げた状態とは、第9段階の「親をたよりにすると同時に親のたよりになり、子が親を支える」という状態である。すなわち、「子の親に対するかかわり方」が、一方的に親をたよりにするかかわり方から、親を一人の人間として理解するかかわり方を経て、親をたよりにすると同時に親のたよりになるかかわり方に至り、心理的離乳は遂げられる。

引用文献

- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. Selected papers. In *psychological issues*. Vol.1. New York: International Universities Press.
- (エリクソン, E.H. 小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子(訳)(1973). 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Hollingsworth, L.S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton.
- 井上健治 (1975). 独立への欲求とおとなに対する抵抗 井上健治・柏木恵子・古沢頼雄(編) 青年心理学—現代に生きる青年像 有斐閣, Pp.235-250.
- 柏木恵子 (1998). 社会変動と家族発達 子どもの価値・親の価値 柏木恵子(編) 結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房, Pp.5-50.
- 小高 恵 (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
- 西平直喜 (1952). 青年—両親関係の心理学的研究 野間教育研究所紀要 第7集.
- 西平直喜 (1990). 成人になること—生育史心理学から 東京大学出版会.
- 落合良行 (1995). 心理的離乳への5段階過程仮説 筑波大学心理学研究, 17, 51-59.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 小此木啓吾 (1991). 親イメージの幻滅と回復 青年心理, 87, 136-145.
- Portmann, A. (1951). *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. Basel: B. Schwab.
- (ポルトマン, A. 高木正孝(訳)(1961). 人間は

「いい親子関係は、子どもの発達とともに変化する」必要があるといえる。すなわち、心理的離乳を遂げるためには、子が変わっていくだけではなく、親もまた変わっていく必要がある。子と親の双方が、心理的離乳を進めていくために努力をしていくことが、親子関係においては大切であるといえる。

今後は、本研究において提起された「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点からみた心理的離乳への過程に関する仮説を確かめる必要がある。さらに、Table 1に整理された、親子関係を検討するための「かかわり

9-親をたよりにすると同時に親のたよりになり、子が親を支えるというかかわり方

(2) 心理的離乳は、上記の9つの順に経過していく。

(3) 心理的離乳を遂げた状態とは、第9段階の「親をたよりにすると同時に親のたよりになり、子が親を支える」という状態である。すなわち、「子の親に対するかかわり方」が、一方的に親をたよりにするかかわり方から、親を一人の人間として理解するかかわり方を経て、親をたよりにすると同時に親のたよりになるかかわり方に至り、心理的離乳は

『筑波大学心理学研究』 掲載論文の引用文献

- 3-困った時には親をたよりにして、子が親に頼むというかかわり方
- 4-親をたよりにしたくないとして、子が親から離れようとするというかかわり方
- 5-親をたよりにしてもしかたがないとして、子が親を見切るというかかわり方
- 6-親をたよりにする関係の変化を求めるというかかわり方
- 7-親をたよりにできるかどうかにかかわらず、子が親を一人の人間として理解するというかかわり方
- 8-親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして、子が親を思いやるというかかわり方

- 究 野間教育研究所紀要 第7集。
西平直喜 (1990). 成人になること-生育史心理学から 東京大学出版会。
落合良行 (1995). 心理的離乳への5段階過程仮説 筑波大学心理学研究, 17, 51-59.
落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
小此木啓吾 (1991). 親イメージの幻滅と回復 青年心理, 87, 136-145.
Portmann, A. (1951). *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. Basel: B. Schwab.
(ポルトマン, A. 高木正孝 (訳) (1961). 人間は

5.1 引用文献の集計

『筑波大学心理学研究』掲載論文数：158

総被引用文献数※：4,217

資料種別	海外文献数	国内文献数	計
雑誌論文	1,830	1,109	2,939
図書・その他	545	733	1,278
計	2,375	1,842	4,217

※『筑波大学心理学研究』掲載の異なる論文から引用されている場合、重複して集計

5.2 論文公開状態調査

1. 引用文献の集計

2. 論文公開状態調査

5.2 論文公開状態調査

調査対象

『筑波大学心理学研究』掲載論文が引用する、
和雑誌収録もしくは日本語の論文1,109本

調査期間

2013年12月1日から同月16日まで

5.2 論文公開状態調査

調査方法

- Kurataらの方法に倣う
- Google検索
 - 検索語：タイトルと著者名
 - 調査対象：結果上位20件
フルテキストで閲覧可能なもの
- 実現手段と公開日を記録



自己制御学習におけるコーピングモデルの提唱 上淵寿

検索結果上位20件を調査

Google.comより

<https://nii.gakugei.ac.jp/edu/np/naid/123436709/0072/>

上淵寿 著 - 引用元 1 - 関連記事

タイトル, : 自己制御学習におけるコーピングモデルの提唱. The new coping-model of self-regulated learning ジコ セイギョ ガクシュウ ニオケル コーピング モデル ノテイショウ. 著者, : 上淵,寿ウエブチ,ヒサシ. UEBUCHI,Hisashi 上淵,寿(東京学芸大学学校 ...

[自己制御学習におけるコーピングモデルの提唱](#)

[ci.nii.ac.jp/naid/130002027349](https://nii.ac.jp/naid/130002027349/)

上淵寿 著 - 2004 - 引用元 1 - 関連記事

自己制御学習におけるコーピングモデルの提唱 The new coping-model of self-regulated learning. 上淵 寿 Uebuchi Hisashi ... We also included meta-emotion variables in the model for intervention, so that we could discuss them in relation to ...



心 理 学 研 究

公益社団法人 日本心理学会

ONLINE ISSN: 1884-1082 PRINT ISSN: 0021-5236

2014年06月21日現在 収録数: 4,172記事

記事

巻号頁

DOI/JOI

資料の中を検索します。

検索

詳細検索

閲覧する

発行機関について

最新巻号

早期公開

J-STAGEトップ > 資料トップ > 書誌事項

心理学研究

Vol. 75 (2004-2005) No. 4 P 359-364

記事言語: Japanese ▼

◀ 前の記事 | 次の記事 ▶

http://dx.doi.org/10.4992/jjpsy.75.359
 JST_Journalarchive/jjpsy1926/75.359

自己制御学習におけるコーピングモデルの提唱

上淵寿¹⁾

1) 東京学芸大学

公開日 2010/07/16

本文PDF [1093K]

抄録

引用文献(24)

被引用文献(1)

In a study of self-regulated learning study, we proposed a new coping model, in order to comprehensively treat emotional regulation and learning strategies. We also included meta-emotion variables in the model for intervention, so that we could discuss them in relation to intervention. We hypothesized specifically that achievement goals and meta-emotions influenced emotional reactions, and which in turn influenced coping strategies. A questionnaire study was conducted with 193 schoolchildren, and result seemed to support our new model.

記事ツール

- お気に入り登録
- 被引用アラート
- 認証解除アラート
- 追加情報アラート

URLコピー

著者にメール

書誌事項をダウンロード

RIS

BibTeX

[ヘルプ]

問い合わせ

この記事を共有



メールで知らせる

上淵 寿¹⁾

1) 東京学芸大学

公開日 2010/07/16

FREE 本女PDF (11092KB)

公開手段と公開日を記録

influenced emotional reactions, and which in turn influenced coping strategies. A questionnaire study was conducted with 193 schoolchildren, and result seemed to support our new model.

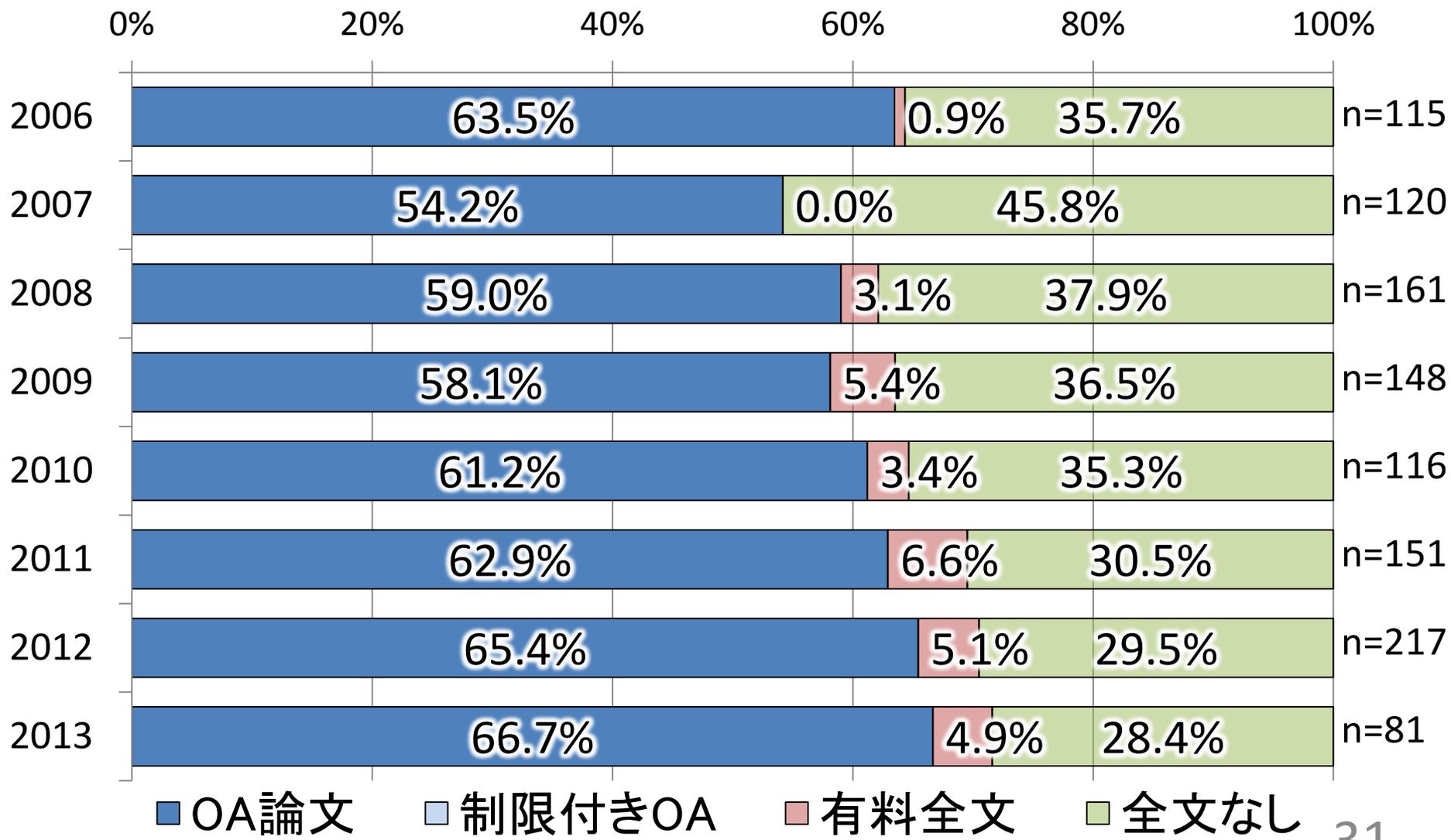
28

6. 論文公開狀態調查結果

6.1 引用論文公開状態の集計

公開状態	件数(本)	割合
OA論文	681	61.4%
制限付きOA	0	0%
有料全文	43	3.9%
全文なし	385	34.7%
総計	1,109	100%

6.2 引用論文のOAの割合(2013年)



6.3 引用時におけるOAの状況

『筑波大学心理学研究』各号の刊行日と
OA公開日を比較

OA公開日が各号刊行日以前

→刊行時OA入手可

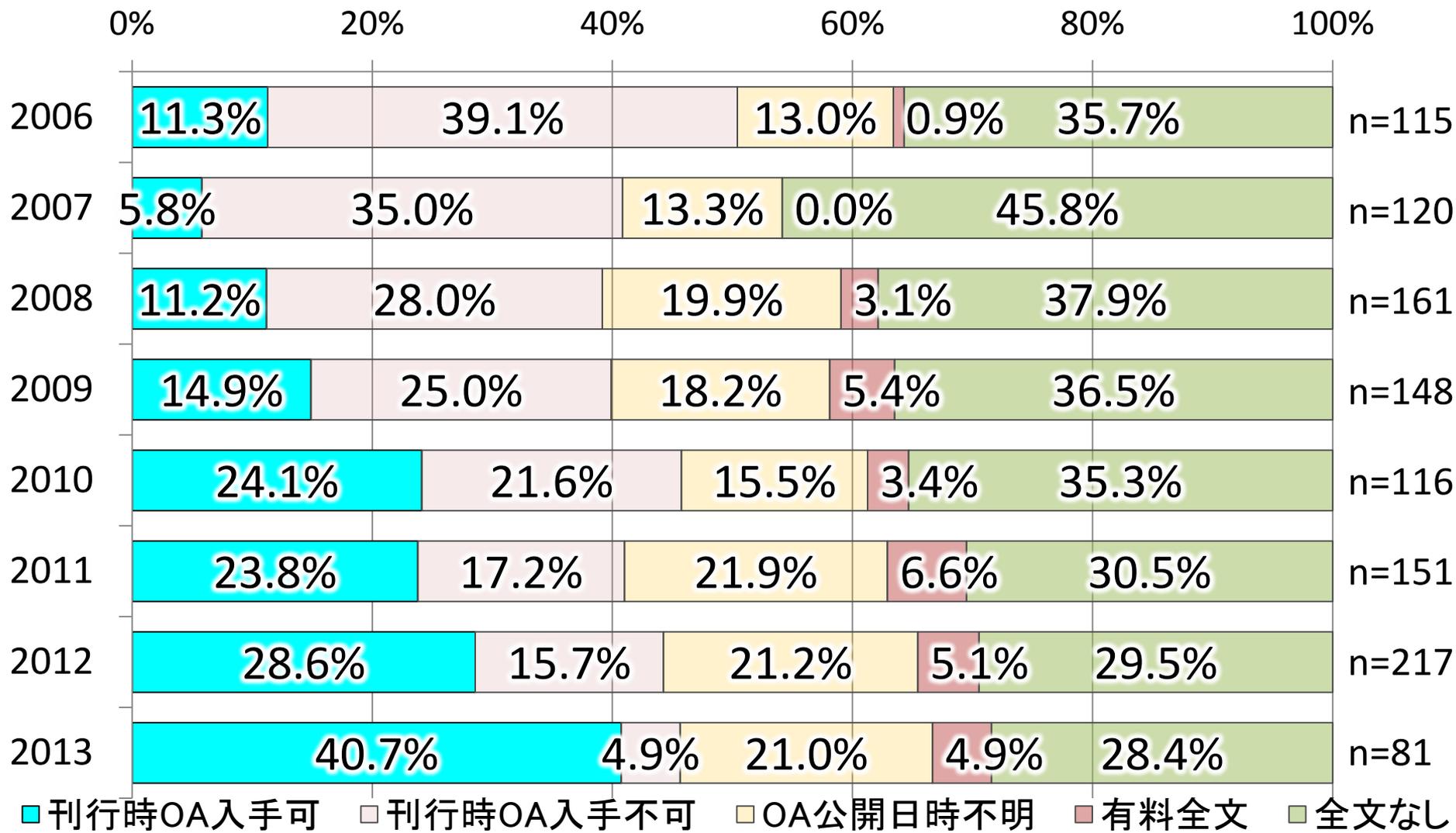
OA公開日が各号刊行日以降

→刊行時OA入手不可

OA公開日が不明

→OA公開日時不明

6.3 引用論文のOAの割合(引用時)



6.4 OAの実現手段

実現手段	件数(本)	割合(%)
OA雑誌	559	82.1%
機関リポジトリ等	245	36.0%
個人のウェブサイト	18	2.6%
分野別アーカイブ等	6	0.9%
購読誌でOA論文を掲載	1	0.1%
無料論文提供サイト	0	0%
その他	6	0.9%

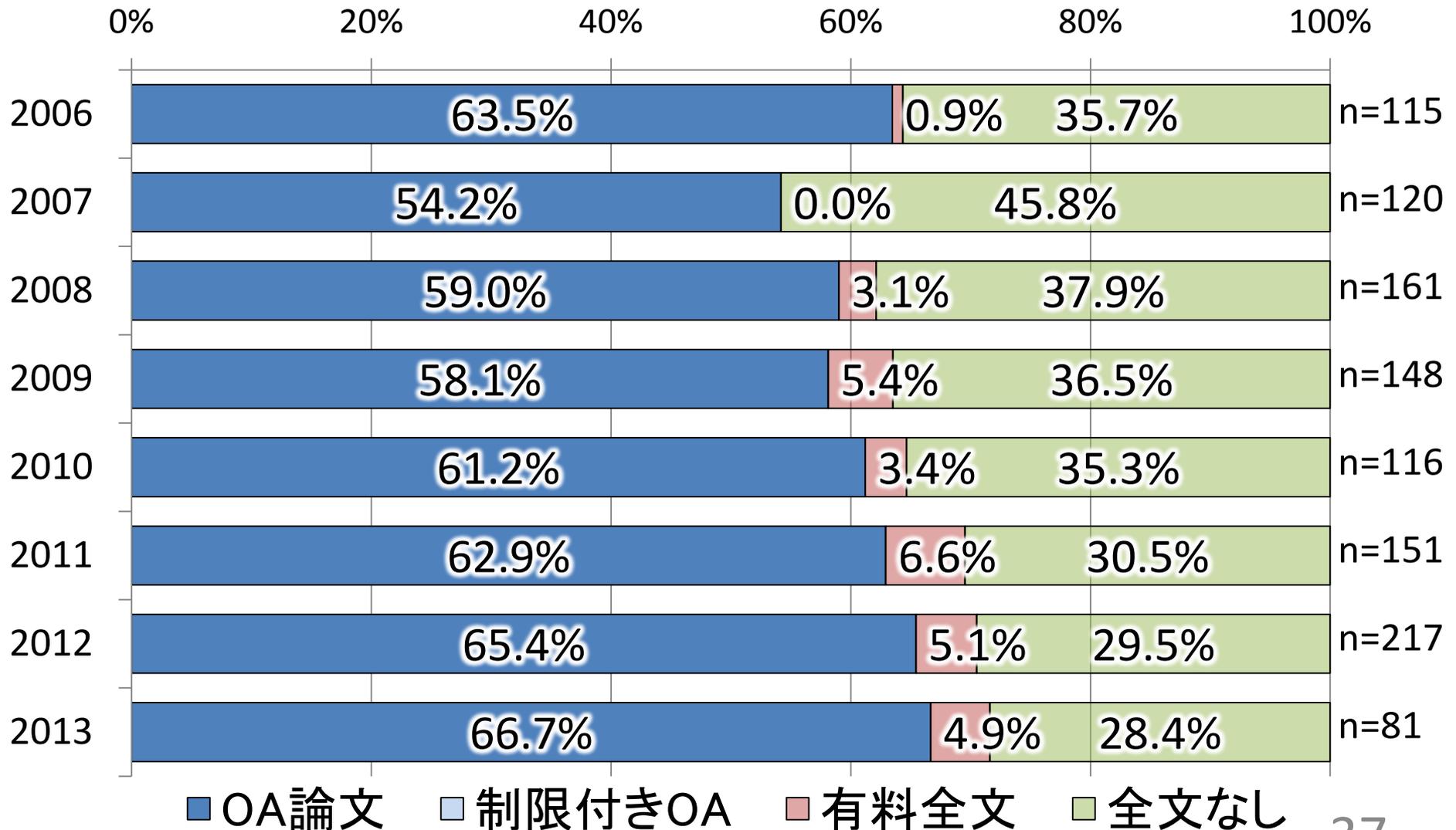
重複あり, n=681

34

7. 考察

7.1 日本の心理学分野における オープンアクセスの進展状況は？

6.2 引用論文のOAの割合(2013年)



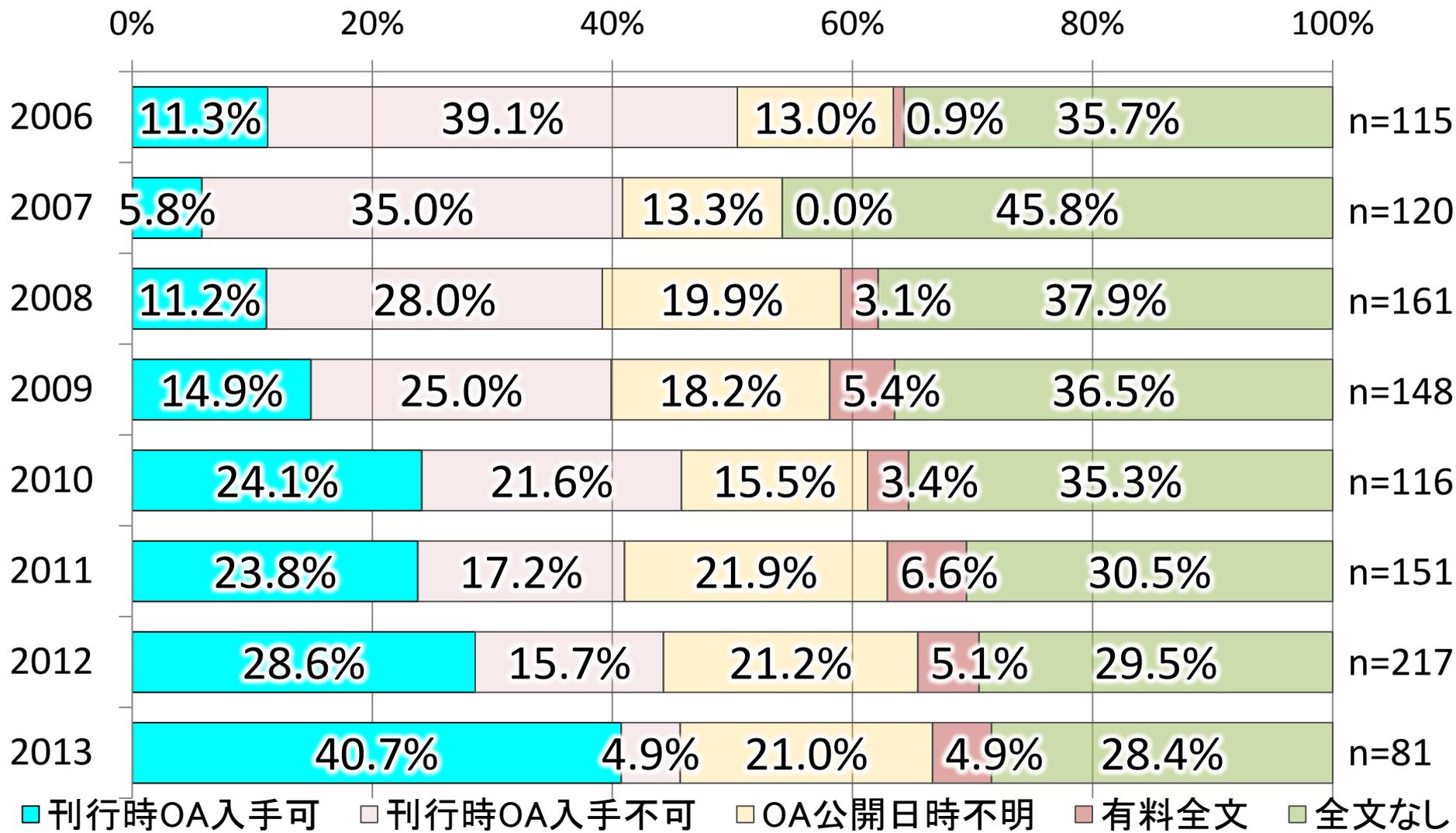
6.2 引用論文のOAの割合(2013年)

0% 20% 40% 60% 80% 100%

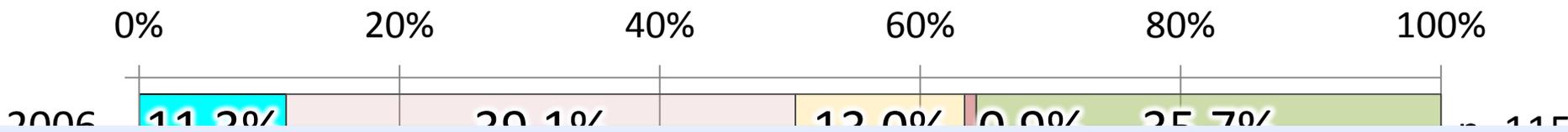
最近引用された論文ほど、
OAである割合が高くなっている



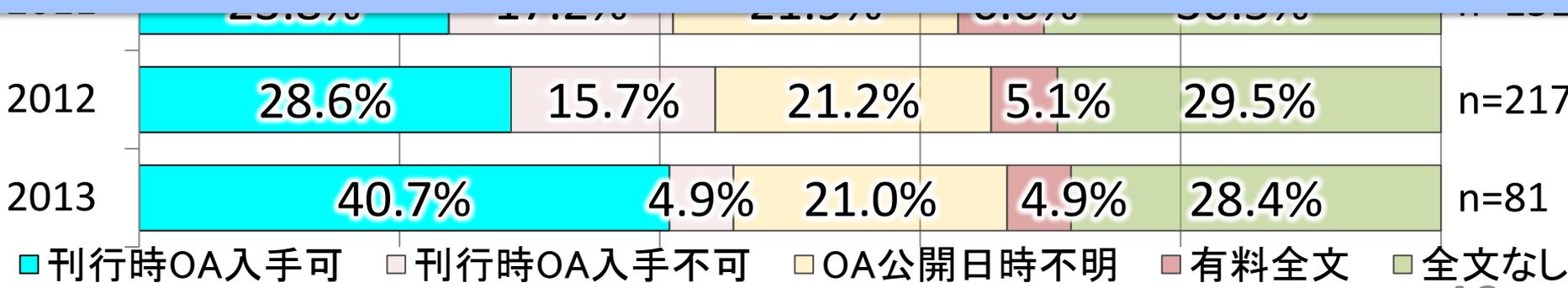
6.3 引用論文のOAの割合(引用時)



6.3 引用論文のOAの割合(引用時)

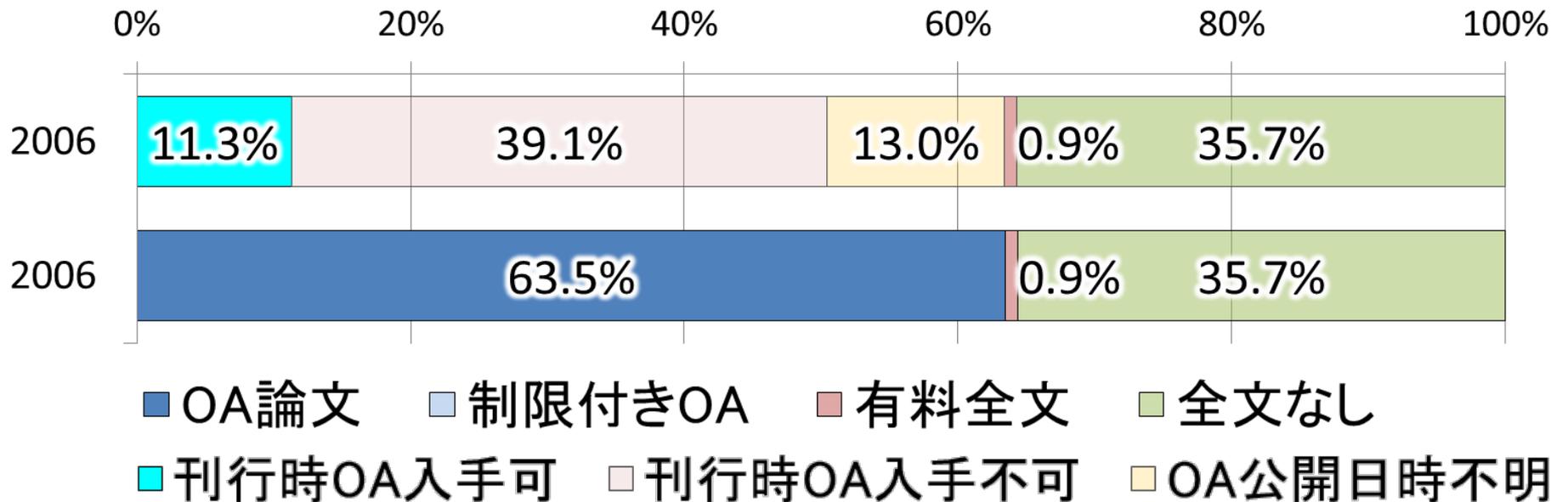


引用された時点でOAである論文の割合はより顕著に高まってきている



■ 刊行時OA入手可 □ 刊行時OA入手不可 ■ OA公開日時不明 ■ 有料全文 ■ 全文なし

7.1.1 論文の遡及的なOA化



上: 2006年引用の論文の引用時の公開状態

下: 2006年引用の論文の2013年の公開状態

7.1.1 論文の遡及的なOA化



論文の遡及的なOA化も進んでいる

上: 2006年引用の論文の引用時の公開状態

下: 2006年引用の論文の2013年の公開状態

7.1 日本の心理学分野における オープンアクセスの進展状況は？

日本の心理学分野におけるOAは
進展している

7.2 OAの実現手段は？

6.3 OAの実現手段

実現手段	件数(本)	割合(%)
OA雑誌	559	82.1%
機関リポジトリ等	245	36.0%

OA雑誌と機関リポジトリ

重複あり, n=681

46

6.3 OAの実現手段

実現手段	件数(本)	割合(%)
OA雑誌	559	82.1%
機関リポジトリ等	245	36.0%
個人のウェブサイト	18	2.6%
分野別アーカイブ等	6	0.9%
購読誌でOA論文を掲載	1	0.1%
無料論文提供サイト	0	0%
その他	6	0.9%

重複あり, n=681

47

6.3 OAの実現手段

実現手段	件数(本)	割合(%)
OA雑誌	559	82.1%
機関リポジトリ等	245	36.0%

77.1% (189本) が紀要掲載論文

重複あり, n=681

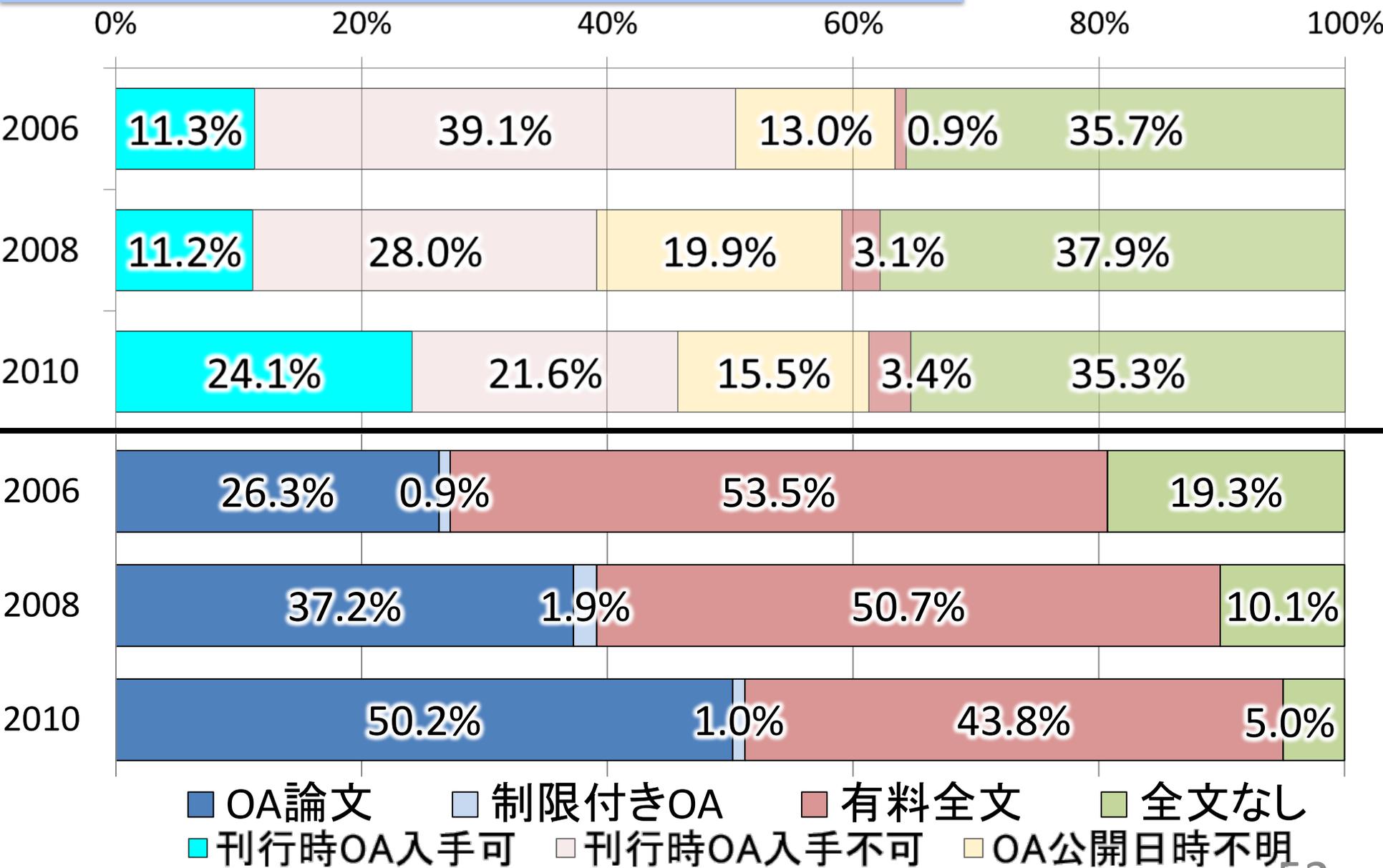
48

7.2 OAの実現手段は？

専らOA雑誌

7.3 他分野と比べると？

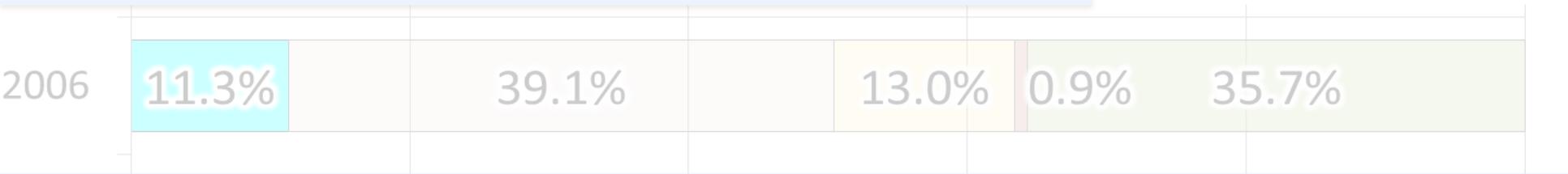
本研究(心理・日本)



倉田ら(生命・国際)

実現されてきたのか.

本研究(心理・日本)



生物医学分野に比べると
日本・心理学分野のOAは発展途上

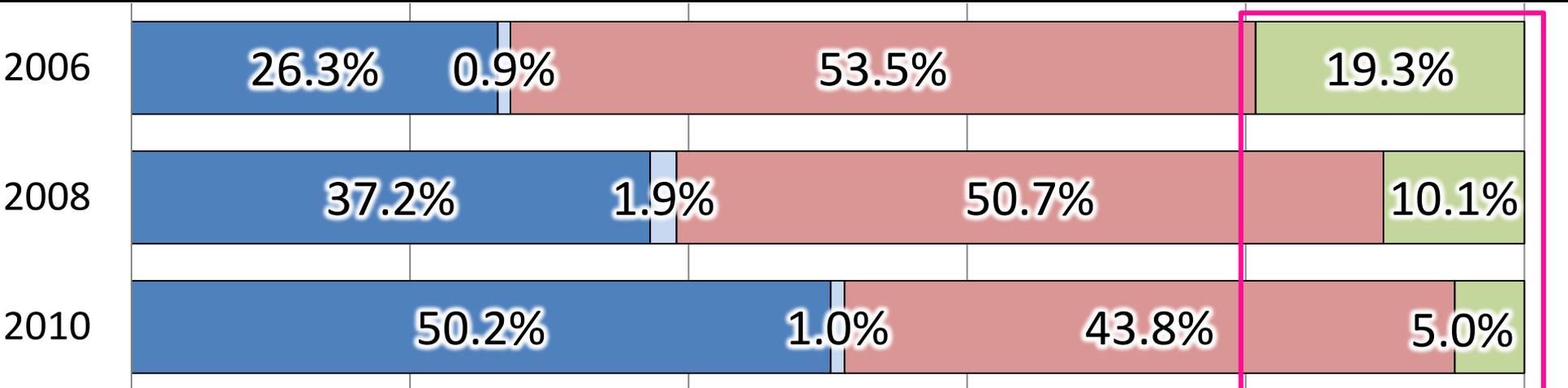
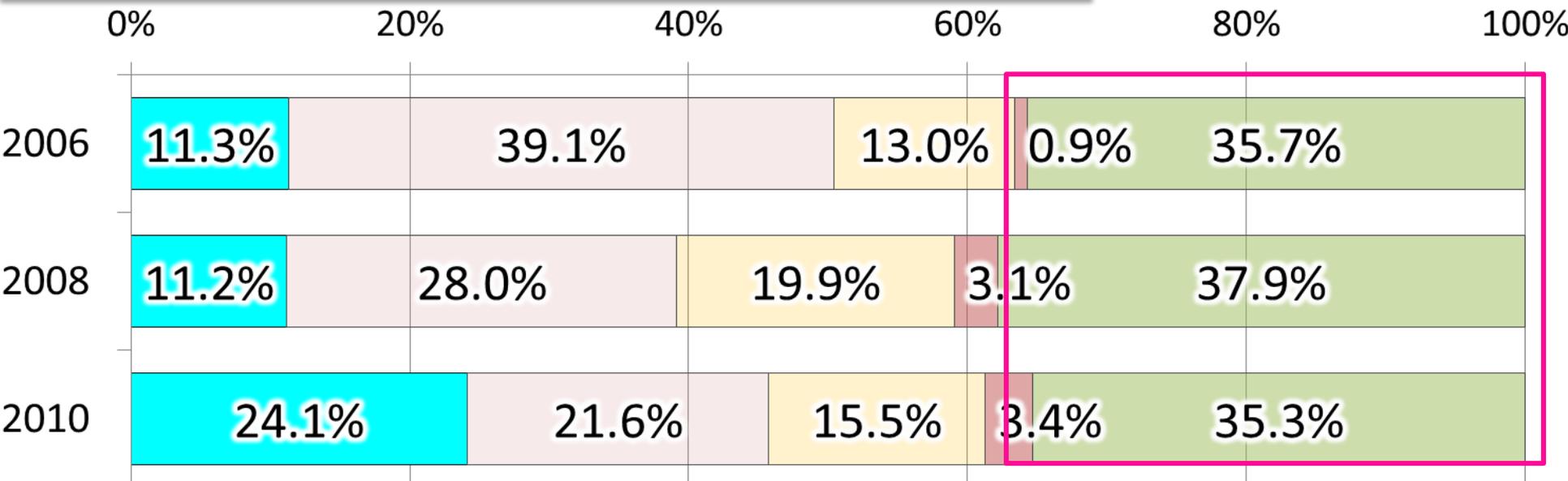


倉田ら(生命・国際)

■ 全文
■ 全文なし
■ OA公開日時不明
実現されてきたのか.

7.4 そもそも電子化状況が・・・

本研究(心理・日本)

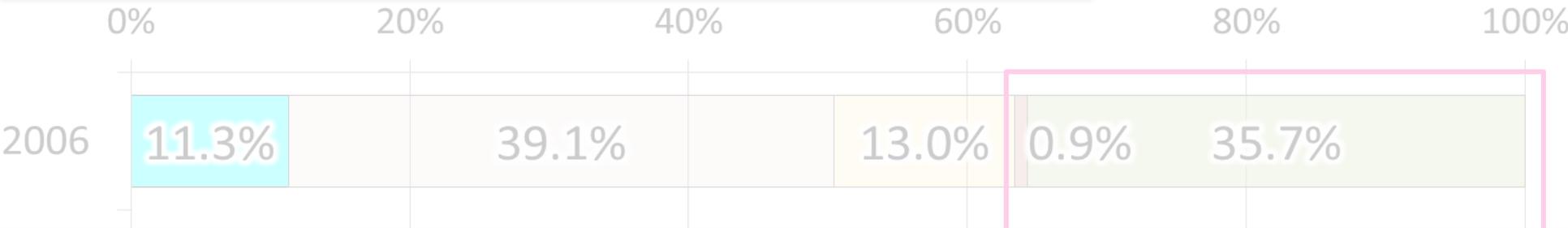


■ OA論文
 ■ 制限付きOA
 ■ 有料全文
 ■ 全文なし
■ 刊行時OA入手可
 ■ 刊行時OA入手不可
 ■ OA公開日時不明

倉田ら(生命・国際)

実現されてきたのか.

本研究(心理・日本)



そもそも論文の電子化が遅れている



■ OA論文 □ 制限付きOA ■ 有料全文 ■ 全文なし
■ 刊行時OA入手可 □ 刊行時OA入手不可 □ OA公開日時不明

8. 今後の課題

本研究：紀要における引用文献が研究対象

- 日本の心理学分野全体については、査読誌を対象とした調査

調査対象論文の査読の有無が未判別

- それぞれの判別を行ったうえでの調査

Thank you for your time!

心理学分野における オープンアクセスの進展

筑波大学 情報学群
知識情報・図書館学類
大原 司

同志社大学 社会学部
教育文化学科
佐藤 翔

筑波大学
図書館情報メディア系
逸村 裕

引用・参照文献

- [1] 佐藤義則. シリアルズ・クライシスと学術情報流通の現在: 総括と課題. 情報管理. 2010, vol.53, no.12, p.680-683.
- [2] 佐藤翔. コンテンツ入手元として機関リポジリが果たしている役割. 筑波大学, 2013, 博士論文. <http://hdl.handle.net/2241/118741>, (参照 2014-06-23).
- [3] Budapest Open Access Initiative. <http://www.soros.org/openaccess/read>, (accessed 2014-06-23).
- [4] 研究活動及びオープンアクセスに関する調査報告書. 国立大学図書館協会国際学術コミュニケーション委員会; 国立情報学研究所, 2006, 86p. http://www.janul.jp/j/projects/isc/sparc/oa_chosa.pdf, (参照 2014-06-23).
- [5] 倉田敬子, 三根慎二, 森岡倫子, 酒井由紀子, 加藤信哉, 上田修一. 電子ジャーナルとオープンアクセス環境下における日本の医学研究者の論文利用および入手行動の特徴. Library and Information Science. 2009, no.61, p.59-90.
- [6] 佐藤翔, 神尾彩子, 逸村裕. 日本の心理学者に対し機関リポジリが果たしている役割. Library and information science. 2012, no.68, p.23-53.
- [7] Kurata, K; Morioka, T; Yokoi, K; Matsubayashi, M. Remarkable Growth of Open Access in the Biomedical Field: Analysis of PubMed Articles from 2006 to 2010. PLoS ONE. 2010, vol.8, no.5, e60925, doi:10.1371/journal.pone.0060925.
- [8] 倉田敬子. Open Accessはどこまで進んだのか(2)オープンアクセスはいかに実現されてきたのか. SPARC Japan news letter. 2012, no.14, p.5-8.
- [9] 土屋俊. “二股に分かれた長い尻尾: NACSIS-ILLにみる日本の学術と機関リポジリ”. 早稲田大学, 2007-02-08/09, Digital Repository Federation. 2007, http://svrrd2.niad.ac.jp/faculty/tutiya/Talks/020807drf_waseda.pdf, (参照 2014-06-23).